1990-6

●各地の音楽リポート

《西北風》よ、天安門を越えて吹け

——中国ポップ・ロックの80年代

橋爪大三郎

戒厳軍部隊が天安門広場に突入したあの89年6月4日を境に、街々から歌声が途絶え、中国のポップスは冬の時代に入った。でもわれわれは、忘れないだろう。中国の若い世代の人びとが、中国の今の心を伝える音楽のニューウェーブを、世界に届けてくれたことを。

このニューウェーブのことを聞きこんだのは、おととし（88年）の夏、上海のテレビ局でのことだった。これまで香港、台湾のポップスに押されっ放しだった中国で、北京を中心に、まったく新しいロックが人気を獲ている、と。これを《西北風》、または《西部揺滾》と称する。中国の陝西省あたり（黄河上流の黄土高原）の民歌をアレンジしたロック、という意味である。

さっそく北京で、知りあった学生さんたちに頼み、《西北風》のカセットを買い集めた。折よく工人体育館（武道館にそっくりの会場）で、「霹靂（ブレークダンス）風金曲演唱会」なるコンサートも聴くことができた。こいつがみんな、むちゃくちゃに面白い。

文化大革命のあと79年からようやくスタートした、中国のポップスは十年の歴史しかない。にもかかわらず、流行音楽は国民にひろく愛されている。才能ある音楽家が大勢、集まってもいる。86年の後半から火のついた《西北風》は、なかでもいちばん注目すべき動きだ。

《西北風》の起源には諸説ある。まず、崔健というシンガー・ソングライターの存在が大きい。まだ20代の彼は、北京交響楽団のトランペット奏者だったが、かたわら、北京にやってきている外交官の息子たちとロックバンドを組み、自作の曲をコンサートで次つぎ発表。「一無所有」「不是我不明白」「新長征路上的揺滾」などが若者に熱狂的に迎えられ、海外でも広く名を知られるようになった。

ロックは〝ブルジョワ腐敗文化の精神汚染〟扱いで、テレビでは一切放送されない。だから音楽ファンは、ラジオのエアチェックが欠かせないのだ。崔健は一計を案じ、昔の革命歌をロックに編曲しなおして、当局の目をかい潜ったともいう。最初楽器が足りなかったせいとかで、チャルメラのような民族楽器が加わるのが《西北風》の特徴である。ふつうの流行歌にちゃんとドラムスがバックにつくようになったのも、ほんの四、五年前からだ。

共産党は、革命の根拠地を延安（陝西省）に置いていた関係で、革命歌をその近辺の民歌から採集した（映画『黄色い大地』に詳しい）。貧しいが、陽気で豪放な農民は、民歌を好み、野太い発声で歌う。これを本歌とする革命歌は、解放軍とともに全国に広まり、老幹部にとっても懐かしいものだという。それが、ロックで甦った。ロシア風（クラシック）でも港台風（南方的）でもなく、まさに中国風。聴いてると、自信が湧いてくる。

もうひとつ大きいのは、映画。北京電影学院82年卒業の、第五世代の監督たちの作品が新しい感覚を映像化した。皮切りは張軍釗監督の『一人と八人』（84年）。日本軍に敗走する八路軍を描いたこの作品は、結局お クラ入りになってしまったが、試写を見た人びとは大いに刺戟を受け、『黄色い大地』（陳凱歌監督、84年）、『紅いコーリャン』（張芸謀監督、87年）などを生む。特に『紅いコーリャン』はベルリン映画祭でみごと金熊賞（一等）を獲得、88年は中国でも記録的なヒットとなる。賛否

両論が渦巻いて「紅高粱現象」とまで呼ばれた。『紅いコーリャン』の音楽は、趙季平。『芙蓉鎮』を主演した姜文に、胴間声で「妹妹你大胆地往前走」「酒神曲」などを歌わせた。これが都会のバンクがかった若者はもちろん、全国的な《西北風》のビッグ・ヒットとなった。メロディーラインはほとんど民謡そのままを活かし、歌詞は張芸謀と二人で適当につけたものだという。

ほかにも、《西北風》の主だったヒット曲をあげよう。☆「信天游」（解承強作曲）は、高音域の伸びやかな望郷の歌だが、ディスコ・アレンジが受けた（中国のちょっとしたホテルや集会所には、いたるところディスコがあり、天井にはミラーボール、生バンドも入って、ディスコ・キングやクイーンの天下である）。ちなみに〝信天游〟とは、陝西省北部の民謡の総称。☆「黄土高坡」（蘇越作曲）は、一度聴いたら忘れられない、名曲。民族楽器を使ったポップなアレンジと、悠久の大河を思わせる曲想が絶妙に調和している。『人民日報』の「新時期十年」読者投票でも、堂々3位に入った（中国では、著作権の概念があいまいで、ヒットすると、各省各地方の企業が勝手にカセットを出版する。「黄土高坡」の場合、海賊？版は五十種をくだらない、という）。以上二曲は、いずれも86年の作品。☆「我熱恋的故郷」（徐沛東作曲）は、厳密に言うと《西北風》ではないそうだが、貧しくてもやっぱり故郷、と歌いあげる民謡ロック。総じて言えるのは、中国の現実をリアルにみつめながら、焦らず絶望もせず、自分たちの力でなんとかやっていこうという気概を感じさせる歌、ということだ。経済開放政策下で育つ世代の、前向きの姿勢を聞くように思った。☆変わり種では、斎秦という台湾の若手歌手が、《西北風》を意識した「北方的狼」を発表、アレンジの斬新さも手伝って、87年ごろから流行した。北京で新しいことが起こる、という予感が、台湾にも伝わったのだろう。

中国には〝持ち歌〟という考えがなく、ひとの歌でもどんどん歌うため、誰でも《西北風》の歌手みたいになってしまう。なかでも注目は、チェリストからデューダした、孫国慶（一昨年来日公演）。人気・実力トップクラス、バラードから《西北風》までこなす劉歓。天性のロッカー、王迪。アイドル・ポップ系の屠洪剛。女性ロッカーでは、田震のシャウトが小気味よい。范琳琳、毛阿敏、杭天琪も人気がある。天津の高校生、謝津（昨年8月来日録音）は、将来が楽しみ。

けれど天安門事件で、《西北風》もおしまいになってしまった。ウーアルカイシの友人だった崔健は、天安門広場で歌ったことで当局に睨まれ、一時は音楽活動も停止されたという。環太平洋音楽祭（89年9月）に参加するはずだった、孫国慶は再来日しなかった。天安門の学生たちが歌った「血染的風采」は、放送禁止になっている。

この「血染的風采」という曲について、すこし説明すべきだろう。「黄土高坡」を作曲した蘇越の86年のヒットで、オーソドックスな編曲の歌曲。しかしその内容は、流血を覚悟して進もう、という愛国的勇気を歌っており、学生の気持にピッタリだった。これが、6月4日以降は天安門事件を象徴する歌となり、香港、台湾でも折あるごとに歌われている。この曲をはじめ、中国のポップスを初めて紹介する『開天闢地』というカセットも、去年発売され好評、この1月には香港の音楽祭で、「一無所有」「血染的風采」の二曲が前例のない特別賞に輝いた。風向きは変わったのである。

中国のいまの心を映す歌は、しばらく聞こえてこないかもしれない。しかし、やがて必ず、《西北風》よりもっと大きなうねりとなって、われわれを驚かせてくれる日が来るだろう。その日を信じて待ちたい。

＊情報提供などの面で、蘇越氏の多大な協力をえました。記して感謝します。

（はしづめ　だいさぶろう／日本ポピュラー音楽学会準備会会員・社会学）